

- 此花区 てへろキッチンカー
— 認知症の高齢者が売り子のお弁当屋さん — ① ②
- 中央区 桃谷スマホサポート、満を持してデビュー!! — ③
- 「大阪市社会福祉協議会 設立70周年記念誌」発刊 — ④ ⑤
- あらためまして、生活支援コーディネーターです。 — ⑥
- 地域福祉活動の今① — ⑦
- 「コロナ禍における地域福祉活動状況調査」より — ⑧
- こんなことやっていますー私たちの施設から、
社会福祉法人堺あかり会 浅香東保育園 — ⑧

大阪の 社会福祉

2021.12

799

The social welfare
in OSAKA

社会福祉 大阪市社会福祉協議会

<http://www.osaka-sishakyo.jp>

午前11時20分、まもなく開店です (此花区社協)

此花区

てへろキッチンカー

— 認知症の高齢者が売り子のお弁当屋さん —

中止期間を乗り越え、
「出張型」で再出発

一流のプロが調理し、認知症のある人が注文や配膳をおこなう「注文をまちがえる料理店」(東京都・平成29年)の此花区版として、平成31年に開催された「てへろキッチン」まちが

いが許されるレストラン」。コロナ禍での中止期間を乗り越え、「キッチンカー」が此花区と隣接する福島区と合わせて6会場に出向くという新たな形で、10～11月に実施されました(主催：てへろキッチンカー実行委員会)。

(2面につづく)

HB

ポッチャで盛り上がったパラリンピック。障がいのある人もない人も対等に楽しめる競技の魅力に憑かれた人もたくさんおられることだろう▼先日、大阪風船バレーボール普及会という団体から、20周年記念の冊子が送られてきた。障がいの有無に関係なく楽しめるポッチャの考え方をさらに推し進めた、勝負にこだわらないスポーツだ▼「ふれ愛、ささえ愛、笑い愛」をモットーに、障がいの有無だけでなく、老いも若きも幼子も、男女も一緒に楽しく体を動かそうという風船バレー。パドミントンのコートに直径40センチの風船だけが道具▼ルールもユニークで、6人制のバレーなのだが、3回で返すのではなく、コート内の全員が1回は触って10回以内に返球するというのだ。全国統一のルールはなく、各地で少しずつルールの違いはあるそうだが、想像しただけで楽しそうな場面が浮かび上がってくる▼この競技の普及のために、大阪でもたくさんのボランティアが参画して、延々20年。共生社会は孤立する人を生まず、排除をしないもの。そんな社会のシンボルのようなスポーツの存在に心洗われた。

(石)

発起人は、特別養護老人ホームラヴィータ・ウーノの中川春彦さん（現施設長）。区社協も協力し、企業やボランティア団体などに声をかけて実行委員会が立ち上がり、平成31年4月に第1回を開催しました（本誌・令和元年6月号掲載）。認知症のある人がいきいきと働く姿は、その場に参加した人たちの心に深く残るものでした。

続々と集まる
共感と応援の気持ち

長引くコロナ禍で、施設の入所者は、外出や家族との面会も制限され、外との交流が極端に少なくなっていました。その状況を案じていた中川さんは、「キッチンカーで地域に出て開催できないか。入所者に売り子としてお弁当を売ってもらい、コロナ禍でもがんばり続ける飲食店の応援にもつながれば」と発案。取組みに関わるメンバーで意見を重ね、キッチンカーのレンタル料、のぼりなどの装飾費、グッズ製作費などの運営資金をクラウドファンディング（インターネットを介した資金調達）を実施した結果、令和3年8月末には目標額50万円の倍以上となる100万円を超える支援金が集まりました。



地声でも聞こえているよ 糸電話

並行して、趣旨に賛同する施設、飲食店、

企業、ボランティア、区役所などに呼びかけ、10月17日から11月6日の間で、5日間・計6会場（施設・区役所など）にキッチンカーが出動し、3つの施設から認知症の高齢者の方々が売り子として参加することになりました。

注文は「糸電話」で

10月21日、此花区社協の玄関ホール。「カレー2つくください」。あらかじめ予約していたお客さんからの注文を、売り子を務める認知症の高齢者の方が感染対策として取り入れられた「糸電話」で聞き取り、キッチンカーの中に伝えます。「糸はピンと張らんと聞こえへんな」「今のは糸電話なくても聞こえてたな」。糸電話は、ユーモアあふれるコミュニケーションツールとなり、サポートする施設職員、ボランティア、お客さんらとともに笑い合う姿が見られました。

会計を経て、お弁当を手渡し。売り子の一人は、「ありがとう」の一言のほかに、話ができるのがうれしい」と笑顔で話しました。お弁当を受け取った後は、初回からこの活動に協



お弁当の受け渡しはこちら（左：此花区社協 久保さん）

力している認知症カフェ「来てみてカフェ」ボランティアグループによる無料のコーヒーサービスや、区内の就労継続支援B型ごらくの販売コーナーが並びます。これらは6会場のうち、区社協会場ならではのコラボ企画。区社協・地域支援担当の久保奈津未さんは「ごらくさんからコロナ禍でイベント販売の場所が減ったと相談を受けていたので、この機会に参加することで地域とのつながりを持つていただけたらと思います。コラボのお声がけをしました。認知症当事者の方の活動や障がいのある方の作品を通して、認知症のある方や障がいのある方の理解が深まればと思います」と話しました。

認知症の人が
輝けるまちに

お客さんが最後に案内されるのは、撮影用の特製パネル。人と人の距離を求められるご時世のなか、パネルから顔を出すと、絵のなかではお互いに手をつないだ姿となっています。その場で出会った人同士も一緒に、観光地気分撮影を楽しみました。

「認知症の人が、輝けるまちをつくりたい」と語る中川さん。活動報告冊子や、講演を通じて、これから一層「てへぺろキッチン」の輪を広げたいという思いがあるそうです。関わる団体・個人が広がり、開催の形が変わっても、認知症の当事者の方々が主役、という当初のコンセプトを貫き、取組みを続けていきます。



パネル前で語る発起人の中川さん